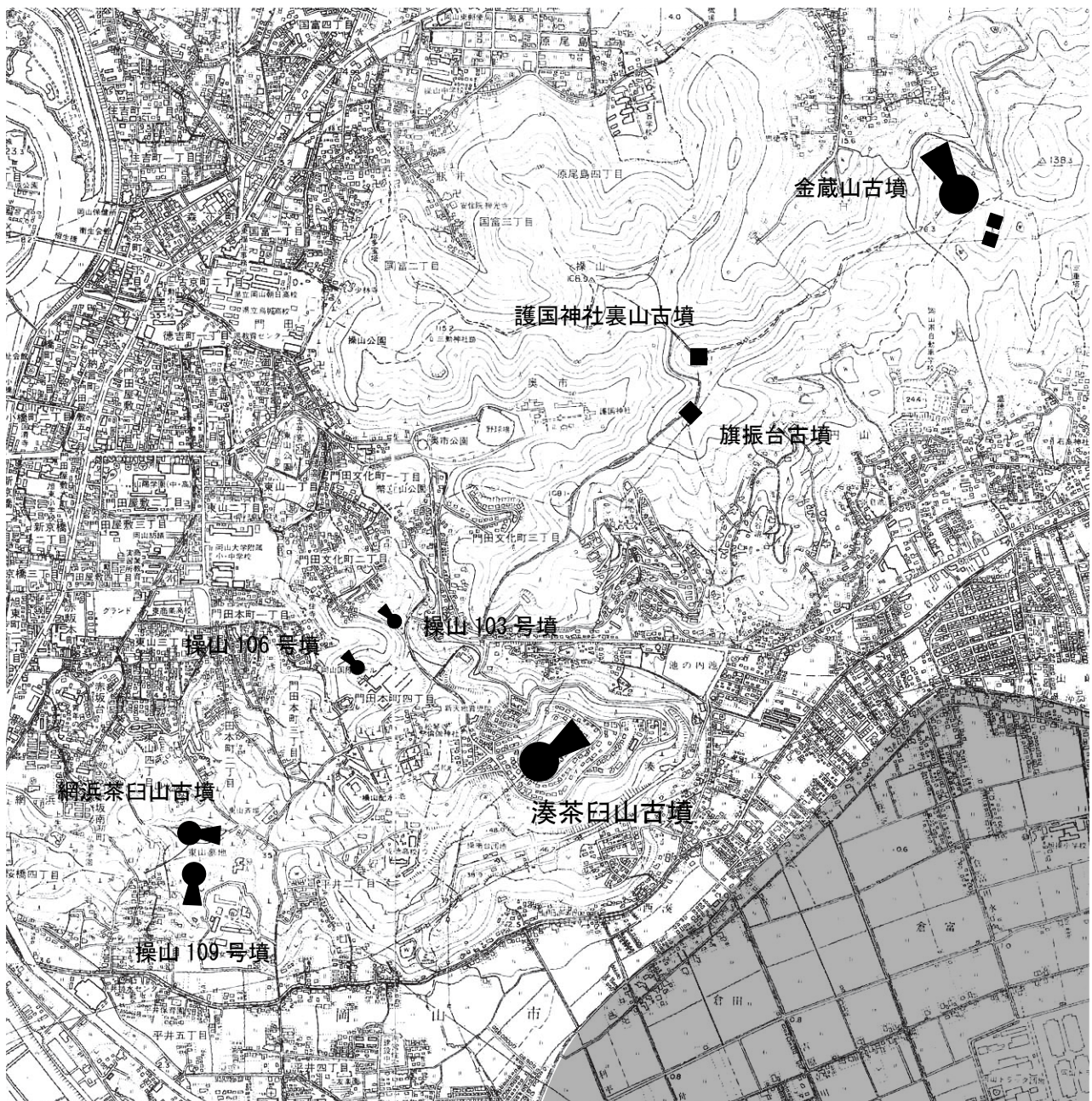


湊茶臼山古墳

—第 2 次調査現地説明会資料—

湊茶臼山古墳と周辺

湊茶臼山古墳は操山丘陵南部の山頂に立地する大型の前方後円墳です。昨年度の調査で墳長約 120m、後円部三段、前方部二段築成で、出土した埴輪の特徴から五世紀初頭頃に造られたことがわかりました。周辺には古墳時代初頭の網浜茶臼山古墳（墳長 92m）、操山 109 号墳（墳長 45m）、古墳時代前期末頃の金蔵山古墳（墳長 165m）をはじめ、操山丘陵全体で 200 基を超える古墳が存在しています。



第 1 図 湊茶臼山古墳と周辺の主な前期古墳 (1/20,000)

湊茶臼山古墳の調査

湊茶臼山古墳は周辺の団地造成の際に重要な古墳として保存されましたが、これまで調査や史跡指定などの保護の措置もとられていません。古墳の形やわずかに採集されている埴輪片から、墳長 120 ～ 150 m、4 世紀後半頃の築造ではないかといわれてきましたが、実態はよくわかっていませんでした。

このたび、岡山市教育委員会ではこの古墳の状況を確認し、国指定史跡として保存を図っていかうと、4 年計画で発掘調査を実施することとなりました。今回はその 2 年度目、第 2 次調査にあたります。

第 2 次調査の概要

第 2 次調査は前方部の形態や付属施設の有無、周辺の造成の状況などを追求するため、前方部周辺に 7 カ所の発掘区を設けました。

1) トレンチ 8 (前方部南斜面)

前方部の南側斜面の状況、墳丘外の付属施設の有無等を追求するために設定しました。

古墳の墳端は墳丘主軸から約 26 m の傾斜変換点とみられます。墳丘の中程に平坦面があり、それより上は盛土、それより下は地山を削りだしています。葺石や墳端の表示はありません。

2) トレンチ 9、トレンチ 10 (前方部南東隅角)

前方部の南東側の角の位置や状況を追求するために設定しました。

トレンチ 9 では墳丘中心から約 91 m の地点に墳端とみられる傾斜の変換点を検出しました。トレンチ 10 では判然としませんが、墳丘主軸から約 29 m 付近がそれにあたると見られます。トレンチ 1 やトレンチ 8 と異なりほぼ墳端まで盛土が認められます。

3) トレンチ 11

前方部の南東側に存在する高まりの性格を追求するために設定しました。

この高まりは、昭和 30 年代の測量の際にはほかの古墳の可能性が指摘されたものです。調査の結果、岩盤の高まりであり古墳ではないことがわかりました。前方部との間は溝状に掘りぬいているようで、トレンチ 2 の葺石状遺構部分につづくと考えられます。

4) トレンチ 2 (前方部前端)

第 1 次調査で検出した墳丘外の葺石状遺構の状況や性格を追求するため、拡張しました。

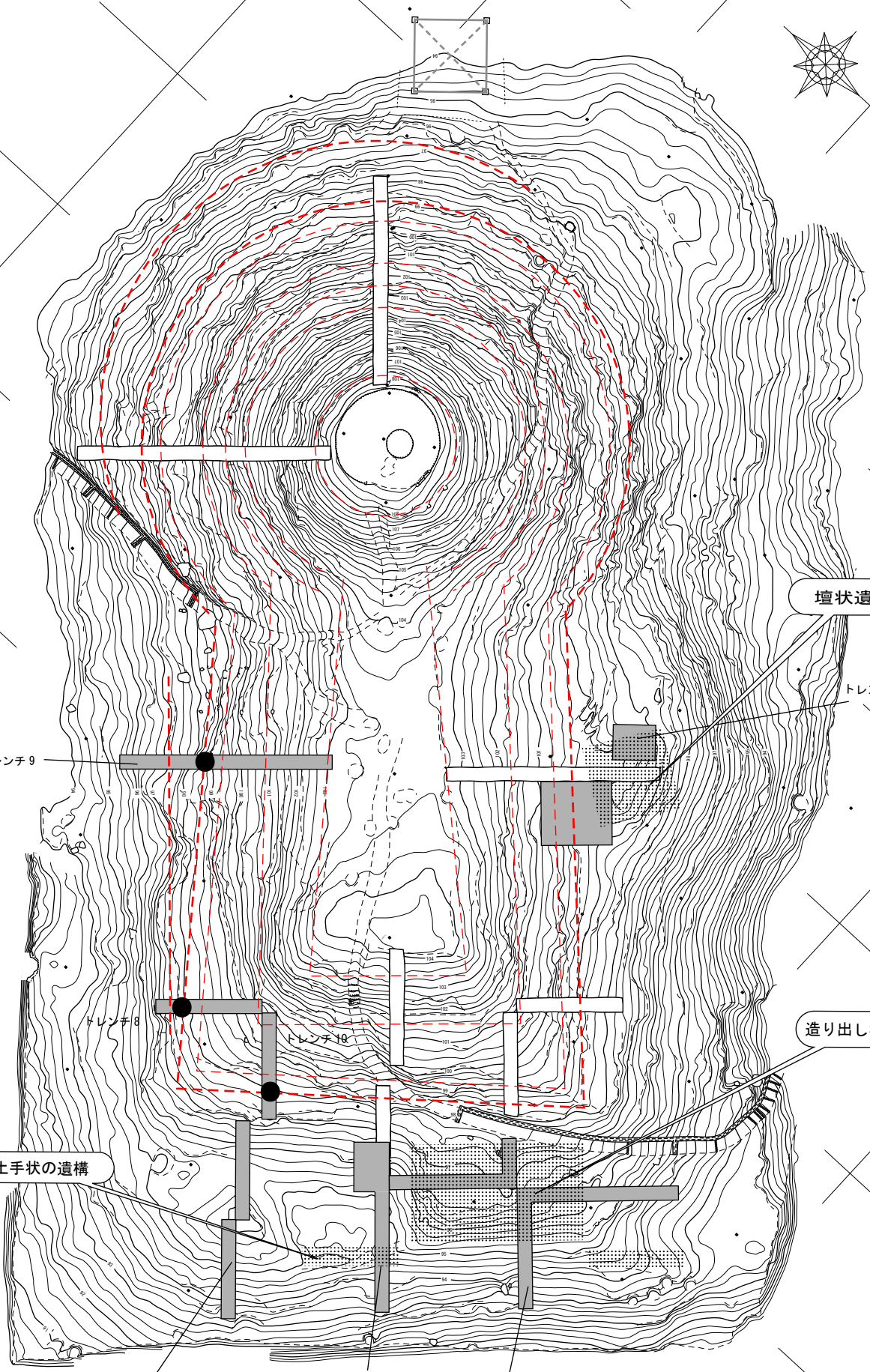
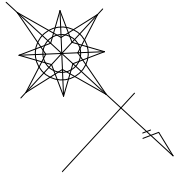
葺石状遺構は地山の岩盤に石材を直接敷きつめており、前方部前端側から北側の「造り出し状地形」の斜面へほぼ直角に曲がっていきます。一番底の部分からは、土師器がつぶれたような状態で数個体分出土しました。これらは器形などはわかりませんが、葺石の外側か「造り出し状地形」の上で祭祀に使われた土器である可能性があります。

また、葺石状地形の外側は土手状の高まりになっています。これも地山を削りだしたのですが、葺石状遺構のとの関連からも古墳に伴う施設である可能性が高いと見られます。

5) トレンチ 11 (「造り出し状地形」)

前方部前端に付属する方形の地形の性格を追求するために設定しました。

調査の結果は、ほぼ全面地山の岩盤であり、明確な加工や遺構は認められませんでした。しかし、決定的な証拠はありませんが、葺石状遺構の状況やその土器の出土状況から祭祀などが行われた空間である可能性は残されます。



壇状遺構？

トレンチ 2 (拡張)

造り出し状の地形

トレンチ 9

トレンチ 8

トレンチ 10

土手状の遺構

トレンチ 11

トレンチ 1

トレンチ 7

0 20m
(1/200)

第 1 次調査
第 2 次調査

6) トレンチ 1 (前方部北斜面)

第1次調査で壇状遺構と考えた高まりの範囲や性格を追求するために拡張しました。

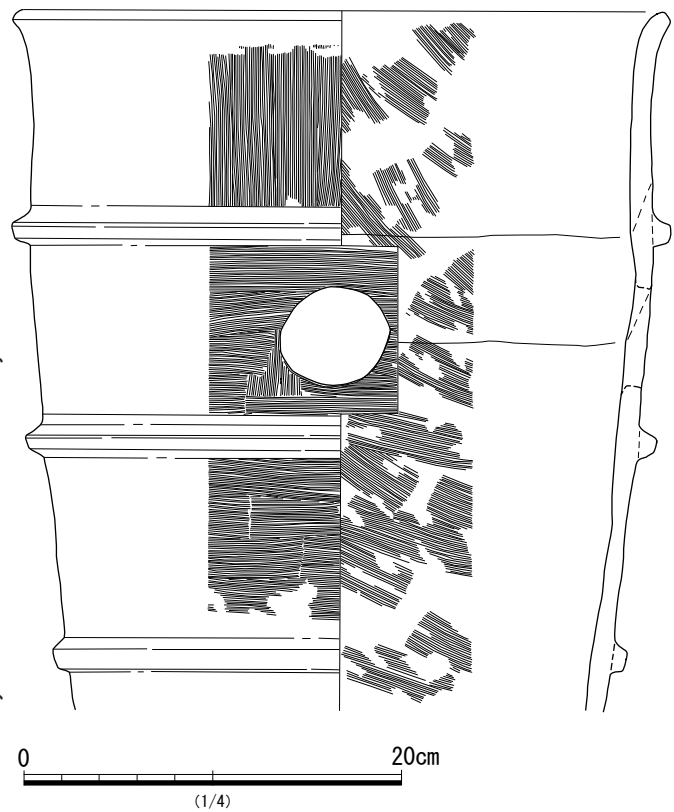
この高まりは北西側と南東側で斜面の状況が大きく異なり、残存状況が悪いこともあり人工的な構造物である証拠を見つけることはできませんでした。元の尾根を掘りぬいた際の残丘ではありますが、堀割の下層から古式須恵器が出土しており、祭祀に使用された可能性も否定できません。

7) 出土遺物とその特徴

各調査範囲から埴輪片が出土しています。埴輪片は出土量が少なく、上の方から崩れて流れてきた土に含まれていました。このことから、後円部や前方部の頂上など限られた場所に埴輪が並べられていたようです。埴輪には、これまでのところ、円筒埴輪と朝顔形埴輪があります。

埴輪以外では、トレンチ 1 から出土した須恵器片、トレンチ 2 から出土した土師器片があります。

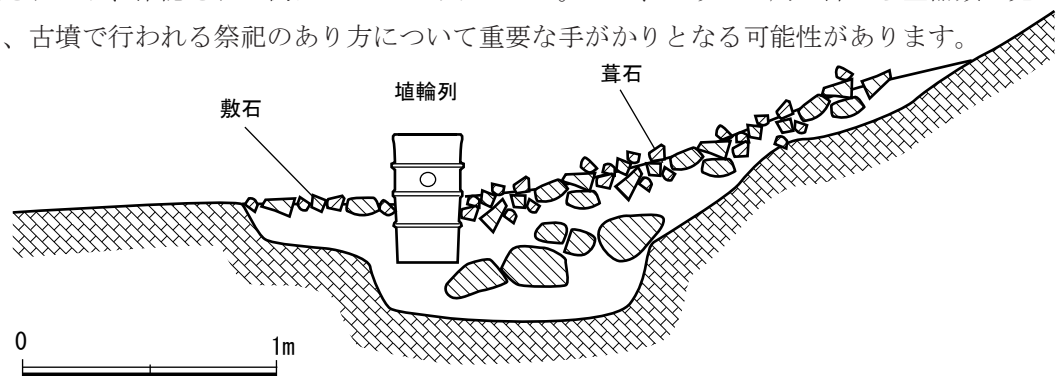
いずれも器形などは不明であり、古墳に伴うものか慎重に検討する必要がありますが、古墳の周辺施設から祭祀に使用されたと見られる小型の土器類が発見されることはほとんどなく、古墳の時期と矛盾のないものであるならば、非常に重要な発見といえます。



出土円筒埴輪

まとめ

第1次調査に引き続き、120 mに及ぶ巨大古墳でありながら湊茶臼山古墳では葺石もなく列石など墳端の表示もないことが再確認されました。一方、岡山市中区沢田に所在する金蔵山古墳は葺石を持ち、墳端部は溝を掘って葺石の基礎を造るとともに埴輪を並べその外側に敷石を敷くなど非常に丁寧な作りです。距離も時期も近い両古墳でなぜこのような格差が生じるのか大きな課題といえます。また、今回の調査では葺石状遺構をはじめ古墳に関係する造成や施設が墳丘の外側に広がっている可能性がわかってきました。葺石や墳端の表示などがいないため、人為的な加工か否か判断することが難しいのですが、これまで丘陵上の古墳でこうした状況が調査されたり、確認された例はほとんどありません。また、こうした周辺部から土器類が見つかることも、古墳で行われる祭祀のあり方について重要な手がかりとなる可能性があります。



金蔵山古墳の墳端構造 (模式図)